

2026 年度春季入学

弘前大学大学院人文社会科学研究科（修士課程）入学試験

一般選抜問題

専門科目：現代ヨーロッパ論

出題意図

I. 人文社会科学研究科に在学中に勉学を継続発展させ最終的に修士論文を書き上げるうえで、先行研究や文献を読むための必要最低限のフランス語能力を備えているかどうかを確認する。

II. フランスおよびヨーロッパが、現在どのような社会的・政治的問題に直面しているかを正しく理解していることは、現代フランスの文化・思想・文学を研究するために不可欠な基礎知識である。

解答例

I.

1) 客観的な言語学的観察によって、話し言葉のフランス語と書き言葉のフランス語のあいだの乖離がだんだん大きくなっていることが確認されていた。

2) 数年前、フランス語は、致命的とも言える危機を迎えつつあると考えられていたが、それは根拠のないことではなかった。客観的な言語学的観察によって、話し言葉のフランス語と書き言葉のフランス語のあいだの乖離がだんだん大きくなっていることが確認されていた。それは単なる語彙の問題だけでなく、シンタックスの問題そのものであった。新しい文法が形成され、とりわけ、いくつかの時制（接続法半過去はすでに使用されていないに等しいが）を消滅させ、語順までも転覆させかねない脅威であった。

II.

<現代フランス語圏文学>

「フランス文学」と言えば、歴史的には、フランス本国で書かれた文学作品が想起されてきたが、「現代フランス語圏文学」は、ある意味、＜フランス語＞という共通項をもちつつも、フランスという国や体制を超えた文学であると言える。主な流れとして、ベルギーとスイスを含むヨーロッパ系の文学、アルジェリア、モロッコ、チュニジアを含むアフリカのマグレブ文学、グアドループやマルチニクのカリブ海（クレオール）文学、そしてカナダのケベック文学などが挙げられる。これらはいずれも、地理的にフランスから離れているというだけではなく、過去や現在において、これらの地域や国が植民地やそれと同等の位置づけをされてきた、あるいはされているということから、「現代フランス語圏文学」においては、それぞれの地域に固有な伝統や言語、社会的・政治的な問題が文学作品に表現され、問われている。

<郊外>

「郊外」は、この言葉が喚起する地理的位置（都市の周辺）を指すだけでなく、極めて社会的・政治的な意味合いを帯びた地域を指す言葉となっている。近年、主要都市の郊外には、低所得者、旧植民地からの「移民」などが住む地域として、貧困、失業、差別といった理由からさまざまな事件や混乱が起きており、そこは現代フランス社会が抱える問題を映す鏡ともいえる。だがその一方で、「郊外」は、「現代フランス語圏文学」とも無関係ではなく、それまでのフランスが知らなかった、新たな文化や流行の発信地ともなっているといえるだろう。

<フランスにおけるイスラム・スカーフ事件>

1989年、パリ郊外の公立中学校の教室で、ムスリムの女子学生3名がイスラムのスカーフを被り、校長に取るように注意を受けたにもかかわらず、それを聞き入れずに退学となった事件が起きた。イスラム教ではスカーフを被るのが伝統・習慣で、女子生徒たちにとってはその信仰心を貫く意思表示であったが、これはフランスの共和制の大原則「ライシテ＝非宗教性」に反する行為であった。そのため、このような厳しい処分が下され、話題となり、国をあげての大議論となった。「ライシテ」とは、政治の領域では「政教分離」であり、日常生活では、公共空間から宗教的要素を排除することを意味する。公共の教育の場である学校もまたしかりである。この「イスラム・スカーフ事件」は、「非」宗教を謳うフランス国憲法のたまもので、「反」宗教ではないものの、現在では、多民族で多くの宗教を信じる人々を擁する国家であるフランスが避けて通れない問題となっている。

<人種差別>：

「人種差別（racisme）」は、時代や地域を問わず、昔からあった現象であるが、近現代フランスにおいて「人種差別」が本格的に注目されるようになったのは、19世紀後半に

起こった事件、ユダヤ人将校のドレフュスがドイツのスパイとして逮捕された冤罪事件、「ドレフュス事件」であろう。反ユダヤ主義の典型例といえるこの事件は当時のフランス世論を二分する大きな出来事であった。それ以降、20世紀に入ってから、第二次世界大戦中のドイツのナチによるユダヤ人排斥へのフランス人の協力は見過ごすことができない。現代では、多様な民族を抱えるフランスでは、ユダヤ人以外にも「移民」でイスラム教徒のマグレブ人が差別の対象となり、民族や宗教の違い、極右勢力の台頭などと相俟ってフランスの大きな社会問題となっている。